

令和6年度 校内研究計画

個別最適な学び部

1 研究主題

挑み・やり抜き、支え合う子ども（1年次）
～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して～

2 研究主題設定の意図

(1) 教育目標から

生成AIの台頭、ビッグデータ、Internet of things (IoT)、ロボティクス等の先端技術の高度化している。あらゆる産業や社会生活に取り入れられた Society5.0時代が到来しつつあると言える。社会の在り方そのものがこれまでとは「非連続」と言えるほど劇的に変わる状況が生じてきている。このような潮流の中、子どもたち一人一人が、自己実現を果たし、社会の一員として活躍していくために必要な力の基礎を育むため、約50年ぶりに教育目標の見直しを図った。

見直しに当たっては、社会の要請、児童の実態、保護者アンケート結果等に基づき、児童に求める資質・能力を洗い出した。そして、その資質・能力を「挑む力」「やり抜く力」「認め合う心」「支え合う心」の4つに整理し、教育目標「たくましく 美しく」を掲げた。4つの資質・能力は、三つの柱である学びに向かう力・人間性等に位置付けられる。三つの柱の中でもとりわけ、学びに向かう力・人間性等に重点を置いて教育活動を推進していくことが掲げられている。

(2) 前年度研究から

前研究「自ら考え、協働する子ども」において、子どもたちは次のような姿で学んでいる。

<p>6年生：体育 跳び箱運動で、現状ではできていない技や発展技にも興味をもち、目標を決めて取り組もうとしていた。</p> <p style="text-align: center;">【挑む力】</p>	<p>2年生：算数 九九を覚える練習の過程で、何回も声に出して練習して覚えたり、覚えた後も逆順やタイムなどの練習方法を工夫したりして、より早く正確に言えるように努力する。【やり抜く力】</p>	<p>4年生：総合的な学習の時間 古町スイーツで販売活動に向けて、友達と役割分担をしながらポスターやしおりを作成し、準備を進めていた。</p> <p style="text-align: center;">【支え合う心・認め合う心】</p>
---	---	---

3月の研究全体会では、上述のような子どもの姿が全ての学年において挙げられ、一定の成果を上げることができた。しかし、これらの姿は、短期間で育成されるものではない。また、特定の教科等ではなく各教科等を通して長期的に育成を目指すものである。そこで、意図的・計画的・組織的に「挑む」「やり抜く」「認め合う・支え合う」ことが必要な教育活動を構想する必要がある。

また、令和五年度末に、教職員に向けて「子どもにどのような力を育みたいか」のアンケートを実施した結果、95%の教職員が学びに向かう力・人間性等の涵養を願っていることが分かった。例えば、「自分で課題意識をもつ力（挑む力）」「自己選択と自己調整をしながら学んでいく力（やり抜く力）」「多様性の価値観が広がる中、子ども同士が認め合い支え合うこと（認め合う心・支え合う心）」などである。教職員の記述を大きく三つに整理できることが分かった。それが、「挑む力」「やり抜く力」「認め合う心・支え合う心」である。

(3) 児童の実態から

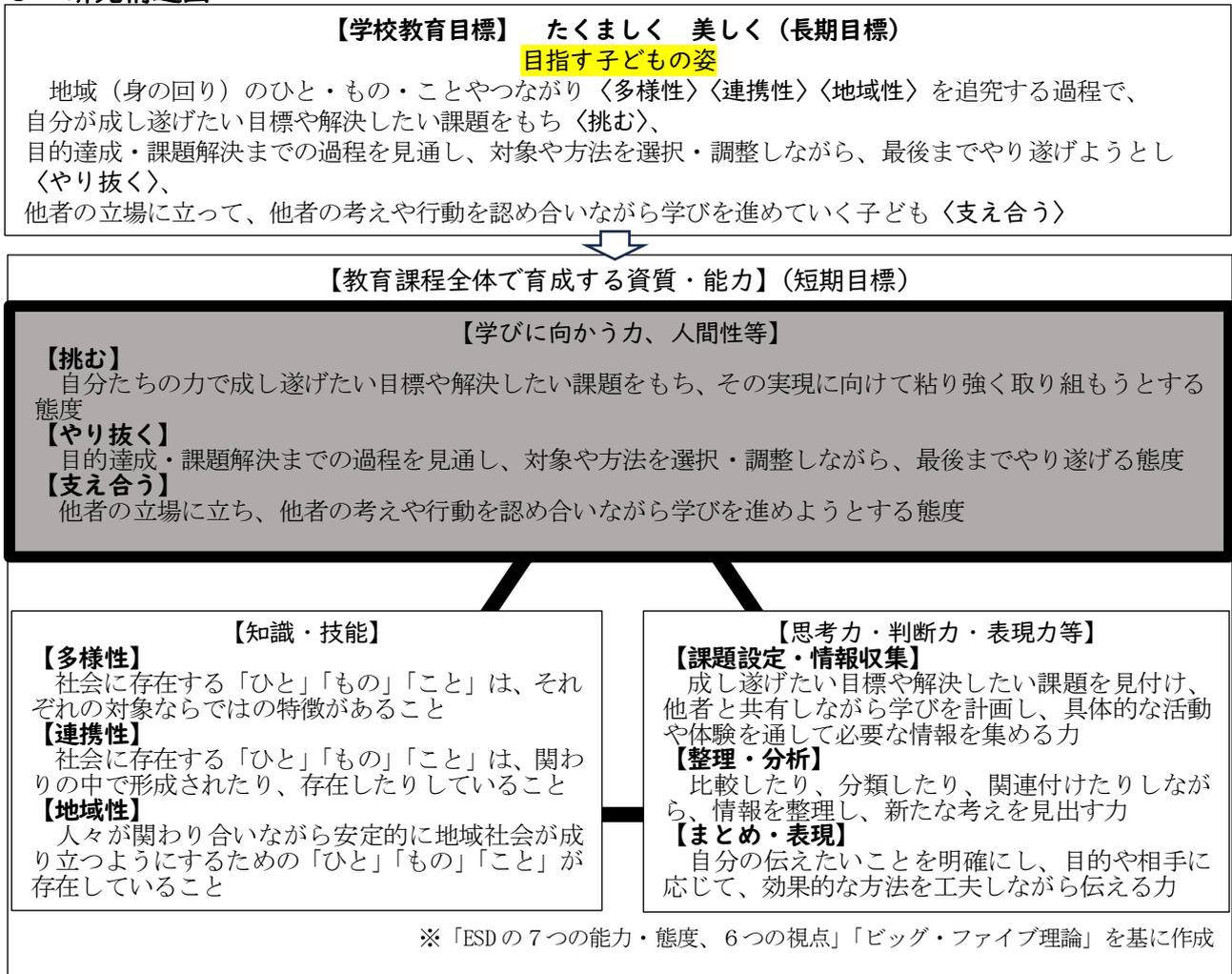
当校の子どもは、自分の良さや可能性を発揮して学ぶことができる。前研究「自ら考え、協働する子ども」では、その子らしさを大切に（個別最適な学び）しながら協働的に学ぶ場を設定してきた。しかし、協働的な学びの場面では資質・能力を発揮することが難しい子どもも見られた。研究の重点とする学びに向かう力・人間性の涵養について田村は次のように述べている。

学びに向かう力・人間性等は、「**すがすがしい**」と思う**充実感**、「**なるほど**」という**達成感**、「**成長したぞ**」と感じる**自己有能感**、「**みんながいたから**」とする**一体感**など**ポジティブな感情とつながることが大切である**。ポジティブな感情とつながることにより、その行為を「いつまでも」行っていこうという「**持続**」につながる。さらには、「**またやってみよう、いつでもやってみよう、だれにでもやってみよう**」と「**安定**」していく。

一人一人の子どもの心の中に上記のような感情が膨らんでいく教育活動を展開していくことが令和6年度に目指すことである。そこで、年度後半から来年度にかけて、個別最適な学びに重点を置いて研究を進めていく。

教育目標や前年度研究の成果、児童の実態を踏まえて、学びに向かう力・人間性等に重点を置いて研究を進めていくこととする。そこで、短期目標として教育課程全体で育成する資質・能力を三つの柱で整理した。今年度は、目指す姿を「**挑み・やり抜き、支え合う子ども**」とし、新研究に取り組んでいく。（※認め合うは、学級の基盤として位置付けたため目指す姿には文言として加えていない。学級力を高める取組などを通して醸成していく）

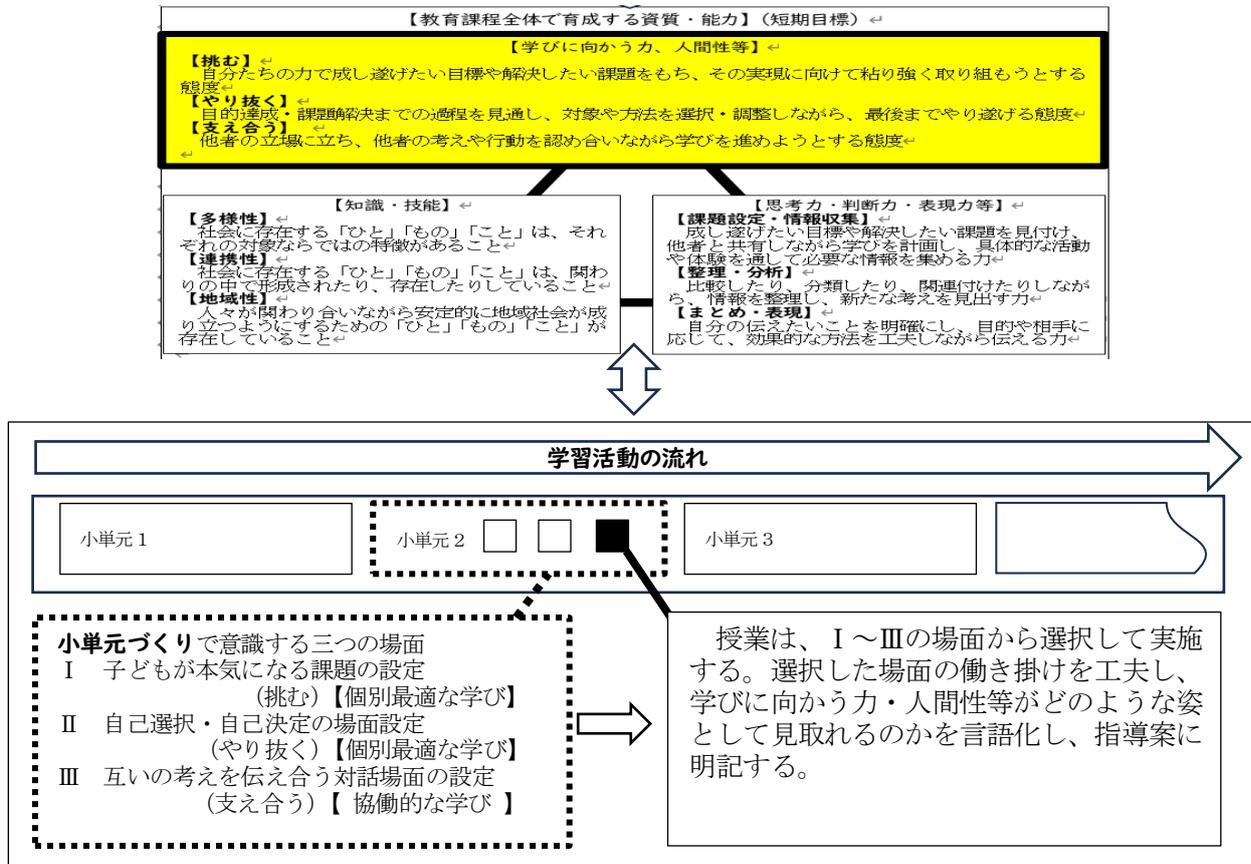
3 研究構造図



4 研究内容

- ① 教育課程を俯瞰して重点単元を設定し、単元構想力を高めること
- ② 学びに向かう力・人間性等の涵養を意図した働き掛けを考え、授業実践すること

(0) 研究構造図 (P2に掲載) と研究内容①、②の関係



(1) 今年度の研究の見通し

研究内容①と②において、個別最適な学びと協働的な学びの視点を取り入れて構想及び実践を行う。今年度の研究は、二期に分けて実施する。二期とは次の通りである。

挑み・やり抜き、支え合う子どもの育成 ～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して～	
<p>【研究第一期：4月～7月】 研究教科 生活科及び総合的な学習の時間 研究内容①重点単元を決めて単元を構想する ②学びに向かう力・人間性等の涵養を意図した働き掛けを構想し、授業実践をする 研究方法 単元構想の工夫と働き掛けの工夫によって見られた学びに向かう力・人間性等を見取る。 まとめ 大研に該当する学年が成果と課題をまとめて提出 研究授業 大研3本 2年2組 4年3組 6年3組 ※上記の記載は全て、大研該当学年。1、3、5年生の担任は、重点単元の実践は行う。しかし、指導案を作成したり成果と課題をまとめたりすることはしない。1、3、5年生の職員及び級外職員は、指導案検討を通して研修を深めていく。</p>	<p>【研究第二期：8月～3月】 研究教科 自分で設定 研究内容①重点単元を決めて単元を構想する ②学びに向かう力・人間性等の涵養を意図した働き掛けを構想し、授業実践をする 研究方法 各学級で授業を実施し、単元構想の工夫と働き掛けの工夫によって見られた学びに向かう力・人間性等を見取る。 まとめ 一人一実践として、各個人が成果と課題をまとめて提出 研究授業 大研2本 授業者は後日決定 大研授業者以外は、一人一実践 ※一人一実践は、12月までに行う。8月以降の研究については、夏休みの研究全体会で詳しく述べる。</p>

(2) 単元づくりの視点

目指す子どもの姿は、次の場面を経て具現できると考えている。

I 自分が成し遂げたい目標や解決したい課題をもつ場面〈挑む〉

II 目的達成・課題解決までの過程を見通し、対象や方法を選択・調整しながら、最後までやり遂げようとしている場面〈やり抜く〉

III 他者の立場に立って、他者の考えや行動を認め合いながら学びを進めていく場面〈支え合う〉

I～IIIの場面では、個別最適な学びと協働的な学びの観点を基にして単元や働き掛けを構想し、実践していきたい。

個別最適な学び

子ども一人一人の特性や学習進度、学習到達度に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うこと。**【指導の個別化】**
教師が子ども一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子ども自身の学習が最適となるように調整すること。**【学習の個性化】**

協働的な学び

異なる考え方が組み合わせたり、よりよい学びを生み出すこと。

(3) 個別最適な学びと協働的な学びの観点を踏まえた単元づくり

① 教育課程を俯瞰して重点単元を設定し、単元構想力を高めること

①計画

重点単元とは、涵養を目指す学びに向かう力・人間性等の発揮が最も期待できる単元のことを意味する。年間指導計画に、〈挑む〉〈やり抜く〉〈支え合う〉を書き込み、小単元づくりで意識する三つの場面を想定していく。(P3と同じ)

- | | | |
|-----|-------------------|------------------|
| I | 子どもが本気になる課題の設定 | (挑む) 【個別最適な学び】 |
| II | 自己選択・自己決定の場面設定 | (やり抜く) 【個別最適な学び】 |
| III | 互いの考えを伝え合う対話場面の設定 | (支え合う) 【協働的な学び】 |

算数 175	③対称(12)	②文字と式(8)	④分数×分数(10)	⑤分数÷分数(7)	⑥資料の整理(6)	⑦ならべ方と組み合わせ方(6)	⑧小数と分数の計算(5)	⑨円の面積(7)	⑩比と百分率(9)	⑪比とその利用(9)	⑫比と図	
理科 105	理科の世界のぼけんしんよう(1)	環境と私たちのくらし(1)	ものの燃え方と空気の(11)	人や動物の体(8)	植物の葉と水(8)	生物のくらしと環境(8)	わたしの自由研究(1)	このくみとはたらき(8)	月の形と太陽(9)	大地のつくりと変化(8)	火山の噴火と地産(4)	
総合的な学習の時間 70	大好きにいがたプロジェクト(30) (挑む) (やり抜く) (支え合う)						大好きにいがた修学旅行プロジェクト(10)					
音楽 50	1.歌声をひびかせて心をつなげよう(6)	2.いろいろな音のひびきを味わおう(6)	3.和音のひびきや音の重なりを感じ取ろう(8)	4.曲想の変化を奏しよう(7) (支え合う)	5.詩と音楽との関わりを味わおう(7)							

生活科と総合的な学習の時間は、〈挑む〉〈やり抜く〉〈支え合う〉の三つを記載する。その他の教科等においては、〈挑む〉〈やり抜く〉〈支え合う〉のうち一つ以上を記載する。

②実践と修正

4月段階で計画した単元について実践を行う。7月の研究全体会において、計画段階では記していなかった単元や題材においても〈挑む〉〈やり抜く〉〈支え合う〉子どもの姿が見られたかを振り返り、付け足す。そして、8月以降の計画を立てる。研究第二期の振り返りについては、3月研究全体会のときに行う。このように年間を通して、計画→実践→修正を繰り返し、学校全体で子どもの学びに向かう力・人間性等の涵養を目指す。

(4) 個別最適な学びと協働的な学びの観点を踏まえた授業づくり

② 学びに向かう力・人間性等の涵養を意図した働き掛けを構想し、授業実践すること

① 本時の構想

- I 子どもが本気になる課題の設定 (挑む) 【個別最適な学び】
- II 自己選択・自己決定の場面設定 (やり抜く) 【個別最適な学び】
- III 互いの考えを伝え合う対話場面の設定 (支え合う) 【協働的な学び】

公開授業場面は、上述のⅠ～Ⅲの場面のいずれかを選択して働き掛けを構想する。Ⅰ～Ⅲは、順序性を示すものではない。そのため、ⅡとⅢを45分授業の中で繰り返す場合があったり、Ⅰの次にⅢの場面を設定する必要がある。つまり、教科特性や発達段階によって異なる。

※研究第二期においては、ⅠかⅡを重視して実践していく。

本時の評価は、学びに向かう力・人間性を子どもの姿として見取ることができるように指導案に記載する。例を以下に示す。

第四学年 総合的な学習の時間「古町スイーツプロジェクト」 表品の魅力を考える場面

III 互いの考えを伝え合う対話場面の設定

【支え合う】

伝えたい魅力が伝わる商品名であるかどうかを話し合う活動を通して、萬代橋の魅力はアーチや美しさであることに改めて気づき、再度考え直そうとしている。【発言・振り返りの記述】

② 評価と分析

本時においては、振り返りの子どもの記述や授業中の発言から子どもの姿を評価する。想定した姿を見取ることができる評価方法を考える。子どもの姿を分析した結果、「何が有効だったのか」「改善点は何か」をまとめて、提出する。フォーマットは後日、提案する。

(5) 研究を支える取組

「挑む」「やり抜く」「支え合う」という課題解決の過程において発揮される姿を涵養していくためには、子ども自身がどのような状況のときに何を使うといいのか(どうするといいのか)を自覚している必要がある。そのために、本年度は研究を支える取組を共有して進めていく。

① 思考ツールの掲示

授業において他者との関わりは、主に音声言語を通して行われる。しかし、音声言語は消えてなくなっていく。一人一人の考えを可視化し、共通点や相違点を考えたり関連付けたりすることを通して、自分一人では気付くことができなかった新たな考えを創り出すことができる。その助けとなるのが思考ツールである。今年度は、掲示物を個別最適な学び部が準備する。それを学年やクラスの実態を踏まえて掲示していく。

② 子どもを探究の主人公にするための学び方(話す・聴くスキル含む)

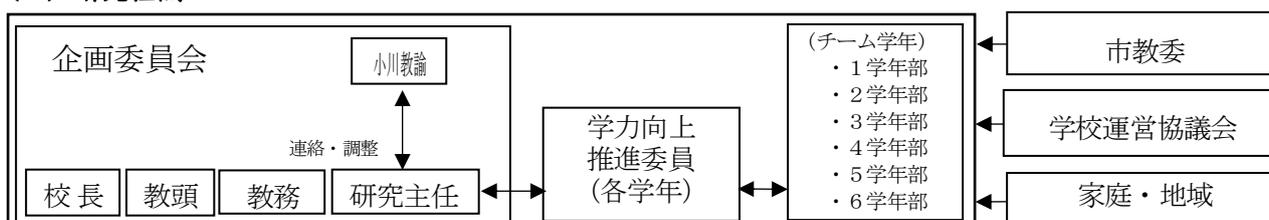
「授業導入において子ども自身が学びを振り返り、本時の学びを決めること」(挑む・やり抜く)「小グループで話し合う際の役割分担の仕方」(支え合う)「対話場面における応答の仕方」(支え合う)など、子どもたちが探究の主人公として学びを進めていく際に必要な学び方について紹介していく。また、スキルポスターは昨年度同様に教室に掲示していく。

③ 学びの軌跡の掲示

生活科と総合的な学習の時間の掲示物を全校で統一して貼っていく。フォーマットをパワーポイントのデータで配信する。そこに、子どもの写真や板書の写真を掲載する。学びの軌跡を残していく。

5 研究の運営

(1) 研究組織



(2) 授業研究

①研究の推進は、「チーム学年」を基本とする。

- ・チーム学年（研究主任、副主任を含む）で指導案の検討を行い、有効な手立てを探る。これをもとに、職員全体での指導案検討を行い、授業研究を行う。
- ・大研では、**チーム学年で他学級での事前実践を踏まえて臨む**。指導案検討も含め、授業者に過度の負担にならないよう「チーム学年」で取り組むこととする。
- ・幼稚園研修の示範授業、中央区担当主事訪問、教育視察等もある。
- ・二期の研究は、一人一実践である。各学年の公開を基本とする。昨年度のように自習体制を組まずに同じ学年の授業を参観することができない。そこで、授業者が子どもの振り返りと板書を記録として残しておく。その資料を基に成果と課題を書く。なお、二期の研究は、大研授業を二本実施する。授業者は後日相談する。
- ・6月の日本生活科・総合的学習教育学会では、低学年氏田教諭、中学年小川教諭、高学年三星教諭が授業公開を行う。授業公開を迎えるまでには、学年や学年部の検討を中心に準備をする。必要に応じて学会の新潟チームのサポートもお願いする。検討スケジュールは日程に記載する。

③指導案の形式は後日提案する。

④授業後に研究主任や学年の学力向上推進部員が成果・課題をまとめ、**研究だよりとして発行**する。

〈研究授業のスケジュール〉

<p>4週間前：学年会で授業構想検討（単元計画と本時の場面の決定） 3週間前：学年で指導案検討（研究主任と副主任を含む） 2週間前：全体で指導案検討（実施時期は、要相談） 1週間前：指導案発送 前日：全職員に指導案配付 授業当日：授業後の協議会を全職員で実施する 授業後：研究主任からお便りを配付。</p>	<p>示したのは、大研授業のスケジュールである。一人一実践の研究授業は、全体での検討は行わない。また、協議会は学年会で実施する。学年で指導案検討をする場合は、その学年の学力向上部がリードして、進める。必要に応じて研究主任及び副主任が検討に参加する。</p>
---	--

(3) 年間指導計画及び単元計画

- ①年間指導計画は、4月段階で共有し、一年の見通しをもつ。重点単元も設定する。（学年）
- ②4月から7月までに実施した単元の関連や並び替えは、夏休み中に実施する。
- ③単元計画は、4月に作成して実践を始める。（2、4、6年生）
 ※二期の研究については、単元計画の作成を夏休み以降とする。

6 日程

時 期 (月)	研究活動	内 容
4月 2日 4月 5日 4月22日	学力向上推進部会 研究全体会① 研究全体会② 15:50～16:35	<ul style="list-style-type: none"> ・学力向上部で研究内容及び方向性の共有 ・年間の研究内容・方向性の提案 ・チーム学年で重点単元を決定し大まかな見通しをもつ ・生活科及び総合的な学習の時間において子どもが本気になる目的や課題の設定とは(ミニ講演)(低学年と中高学年に分かれて実施) ・研究全体会①で決定した重点単元の構想
5月7日 5月28日 5月中	指導案検討① 15:50～16:35 指導案検討② 生活・学習意識調査 項目の見直し	<ul style="list-style-type: none"> ・指導案検討(6月の学会の公開学年)細案 ・単元構想や授業構想(6月の学会の公開学年以外)略案 ・生活・学習意識調査の学校独自の項目の見直しを行う。(教務と連携)
6月22日	日本生活科総合的学習教育学会新潟大会	・日程細案や役割分担については後日提案(実行委員会及び校内の運営チームの相談によって決定)
夏休み前まで	・重点単元のレポート作成	・2, 4, 6年生が定めた重点単元の成果と課題をまとめて研究主任に提出する。
年間を通して	<ul style="list-style-type: none"> ・学びの軌跡を計画的に作成 ・思考ツールの活用及び紹介 ※教室掲示もしていく 	<ul style="list-style-type: none"> ・重点単元の掲示物を全校で統一して貼っていく。フォーマットをワードのデータで配信する。そこに、子どもの写真や板書の写真を掲載する。学びの軌跡を残していく。印刷は、カラーの拡大機を使用する。インクや紙などの費用は、日本生活科総合的学習教育学会の補助金を使用する。 ・教室掲示用に思考ツールの掲示物を作成する。
9月～11月	大研2回	<ul style="list-style-type: none"> ・指導案検討と協議会は全体で実施。 ・指導案検討日や大研授業日及び授業者は後日提案。
7月中旬	県小研学習指導改善調査	・4・5・6年生で実施・採点・分析
7・11月 夏・冬	生活・学習意識調査	<ul style="list-style-type: none"> ・新潟市の生活・学習意識調査を行い、その結果を基に各学年で夏期休業中・冬期休業中に学年経営戦略会議を行い、成果と課題、次期への方策についてまとめる。 ※学校独自の項目の見直しを図る。(5月末までに)
7月30日 or 7月31日	<ul style="list-style-type: none"> ・個別最適な学びと協働的な学びの研修 ・年間指導計画及び単元計画 	<ul style="list-style-type: none"> ・講師をお呼びして、生活・総合に対する理解を深める。(予定) ・各学年で年間指導計画の見直し、修正。 ・二期の一人一実践に向けた単元計画の作成
5月1日	標準学力調査(全学年)	国語と算数を実施する。
2～3月	学校評価 研究全体会	年間の成果と課題を明らかにする。

7 参考引用文献

- (1)新潟大学教育学部附属新潟小学校、一柳智紀（2016）
「対話する」スキルで子どもが変わる！授業が変わる！
- (2)文部科学省（2017）小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編
- (3)田村学（2018）深い学び 東洋館出版社
- (4)小川雅裕（2019）授業のビジョン 東洋館出版社
- (5)鹿毛雅治（2019）授業という営み 教育出版
- (6)田村学（2021）学習評価 東洋館出版社
- (7)小川雅裕（2021）すべての子どもを探究の主人公にする 本音で語り合うクラスづくり 東洋館出版社
- (8)奈須正裕（2021）個別最適な学びと協働的な学び 東洋館出版社
- (9)文部科学省（2021）「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、
個別最適な学びと協働的な学びの実現～（答申）
- (10)マッシューサイド（2021）多様性の科学 ディスカバー・トゥエンティワン
- (11)文部科学省（2021）「持続可能な開発のための教育（ESD）推進の手引き」（令和3年5月改訂版）
- (12)奈須正裕（2022）個別最適な学びの足場を組む。 教育開発研究所
- (13)谷 伊織（2023）Big Five パーソナリティ・ハンドブック 福村出版
- (14)田村学（2024）「縦と横」で考えるカリキュラムデザイン 文溪堂